

## 20年に及ぶ台湾姉妹校との交流・海外研修旅行の意義

山藤 賢

昭和医療技術専門学校 学校長

昭和医療技術専門学校では、1996年より毎年、第2学年次に台湾への研修旅行を行っている。その歴史は20年に及ぶ。現地では、臨床検査技師養成校で姉妹校である「中台科技大学」にて学生、教員を含めた交流会を行うのが一番の大きなイベントであるが、他にも、臨床検査分野で活躍する著名な先生の講演を賜ったりもしている。もちろん中正記念堂や九份などの著名な観光地も訪ねるが、衛兵交代や夜市の体験、龍山寺、故宮博物館などの見学を通して、現地の歴史や文化にも触れる。台湾研修旅行の目的は、時代に合わせて変化もしてきているが、毎年その意義を確認しながら、内容をアレンジし、細かい変更を続けている。学生交流会においては、私と姉妹校校長の両学校長による両校学生への講演時間、記念品交換会などもあるが、学生同士で過ごす時間を主に多く取っており、レクリエーションや共にとる昼食などを通して、異文化交流が盛んに行われている。それでは、海外研修旅行の一番の意義とは何であろうか。現在、私自身は、「多様性の体感」ではないかと考えている。昨今の本校学生は、海外に行った経験がある者が非常に少ない。ほとんどのものがパスポートの取得から始めて、初の体験である。その体験で感じた「感覚」が大事なのではないかと思う。皆さんも経験がおありだと思うが、海外の空港に降り立つとその国独特の「におい」のようなものを感じる。その土地の空気、食事の味、雰囲気、人のあたたかさ、そのようなものは、インターネットでその国を調べ、いくらわかったような気になっても、「体感」していない以上、「経験」にはならない。一番大事なのは、この「経験する」ということである。我々がこの世の中で幸せに生きていくためには「知恵」が必要である。ある方が、知恵＝知識×経験だとおっしゃっていた。本当に至言だと思う。知識だけがいくらあっても意味はない。そこに経験を加えて初めて知恵になるのである。昨今は、知識や資格だけで満足する若者、また教育者も増えているのではないだろうか。しかし、そこには、経験、行動が伴わなければ、生きていくための強い力は決してつかない。ただし、経験にはリスクが伴う。それを乗り越えて行動していくことに研修旅行の存在意義はあるような気がする。現地学生とのお別れのときには、皆、涙を流して別れを惜しんでいる。現地ガイドさんから台湾という国の成り立ち、そこで生きていく「自分」という存在の話を聞くと、学生はやはり涙する。そこで感じるのは、我々が日本人であるという強いアイデンティティである。真のグローバル化というものは、外国語を覚えることでも、海外に行くことでもない。ましてや海外文化を迎合することでもない。我々が自分の存在、自分達の文化を大切に、それを外向きに発信し、世の中を豊かにすることと考える。そのための学校教育の中での取り組みなども当日は、紹介したい。